

氏名（本籍）	キム ジュヨン 金 姝延（大韓民国）
学位の種類	博士（被服環境学）
学位記番号	博甲第44号
学位授与年月日	平成25年3月11日
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当
論文題目	着装行動における「場所と場所性」 A Study of Place and Placeness in Clothing Behavior
論文審査委員	（主査） 教授 濱田 勝宏 教授 照井 義則 教授 申 恩泳 教授 土屋 淳二（早稲田大学）

論文内容の要旨

本論文は場所によって異なるファッションスタイルの背景を理論的に解釈しようとする試みである。特に社会的行為である着装行動を研究するに当たっての理論的方法として「場所と場所性」を取り入れることを提案、着装行動の分析において新たな可能性を明示することを目的としている。

したがって、これまでの着装行動に関する研究を振り返るなかで社会的側面からの新たな解釈方法として「場所と場所性」を取り入れることを主張するものである。

論文の概要は以下に示す通りである。

まず、第1章では本研究の背景と目的、そして研究のこれまでの流れを説明する。

第2章では、着装行動の基礎概念について定義し、そしてその機能について検討するなど、着装行動の本質にアプローチする。さらに、社会学的領域における着装行動の先行研究を考察し、着装行動の多様な接近可能性を提示する。その一環として行った「着装行動と場所のイメージの関係」の調査結果を参考にして、場所と着装行動の関係性を明示し、場所のイメージが着装行動に影響することを改めて示した。しかし、ここで問題となるのは着装行動に影響を与え場所のイメージが生じる仕組み、そしてどのような仕組みで着装行動に影響を与えているかに関する理論的解釈の必要性である。その点について試論を提案した。

第3章では、「場所と場所性」の原点として初期社会学におけるÉ.デュルケムとG.ジンメルを中心とする社会学的観点での社会空間の論稿を省察することとした。

今日、デュルケムの社会学理論の中で社会空間論が再評価されているが、彼の見解が一種の地理学的立場として扱われ、限界があった地理学の新しい突破口として用いられている理由について考察する。さらに、心理的立場で空間を捉えたジンメルの社会空間論について共に考察した。特にデュルケムの社会空間論の中心であるされる「社会形態学 (morphologie sociale)」、ジンメルの「形式社会学 (formale Soziologie)」に基づいた空間論を再検討し、彼らの空間像及び彼らが目指した空間論を改めて検討した。デュルケムとジンメルは社会学に根拠をおきながら社会学的

見地での空間論の正当性を確立しようとしたのであり、特に地理学という限定された空間研究に思考に転換をもたらし、後代多くの空間論(社会科学での空間論、都市社会学など)にも影響を与えるなど、「場所と場所性」が形成される土台を作ったと考えてよい。

第4章では、都市社会学の見地から場所概念の変容を論じることとした。

シカゴを舞台に形成された初期の都市社会学は社会学においては本格的な最初の空間研究であった。しかし、人間生態学的立場でのイデオロギー的理論の展開は結果的に限界を示し、社会現象に参与する過程や社会関係を考慮しない都市の限られた範囲での解釈は狭義の空間論に留まることになる。

ところが都市社会学の研究に関する反省は、1970年代以降欧米を中心に柔軟性を持った新たな空間論として展開される。特に1980年代以降はさらにその研究が多様化し都市を社会構造の投影とされ、都市という空間形態は社会的関係や過程から生み出された現象としての意味が内包される空間形態、いわば我々の社会生活に関わる様々な「場所」という概念で研究することへの変容が見られた。このような新しい空間論は都市社会学に限らず、幅広い領域へ進み、空間に対する理論と見解での革新をもたらし、多様な立場での研究がなされるようになった。その一連として、H.ルフェブル、D.ハーヴェイ、J. アーリ、E.レルフの空間論を検討し、彼らの空間像の特徴を考察した。

特に本研究は場所のイメージと着装行動との関係における新たなパラダイムを目指すものである。その点でレルフの空間論は個人や集団が主体としてそのアイデンティティを構築することに結び付けた「場所」での経験とその意味を強調し、個人や集団が個別的な「場所」を作り出していく力を評価することによって場所のイメージと着装行動の関係を説明するものとして適切であると判断した。その意味でレルフの理論を中心に「場所と場所性」を詳述し考察することとした。

第5章では、「場所と場所性」の概念、構成要素、場所性の形成過程、先行研究の動向を通じて着装行動における「場所と場所性」の有用性を論じる。

そして、「銀座」と「表参道」を例にテキスト分析を通じて着装行動と関連する場所性を抽出、場所性の形成要因について明らかにすることを試みた。

その結果、銀座は1920年代から2010年代まで4つのパターンに分けて観察すると、①「異文化・雰囲気を楽しめる街」、「日本ファッション文化をリードする先端の街」②「斬新で活気がある街」、「国際的感覚のファッション・情報の街」、③「高級で洗練された大人の街」、「先端・世界的ファッション街」、④「新旧を併せた買い物ができる便利な街」、「高級なファッション街」という場所性が抽出された。

表参道については1960年代から2010年代まで二つのパターンに分けることができる。即ち、①「おしゃれな若者の街」、「流行を発信する先端ファッションの街」、②「高級で洗練された大人の街」、「クリエイティブでファッションナブルな街」という場所性が抽出された。

以上の抽出された場所性は銀座と表参道での具体的な着装行動に影響を与える「場所性」として明らかになり、異なるファッションスタイルの背景としても説明可能であることが確認された。さらに、場所性が形成された要因を考察した結果、「近接・類似性 (Proximity & Similarity)」、「歴史性(Historicity)」、「コミュニティ (Community)」、「建物の象徴性 (Landmark)」があげられることが明らかになった。

第6章は本論文の総括として要約し、本研究の成果や反省すべき点を踏まえた上で、今後の課題を提示することによって結びとしている。

論文審査結果の要旨

本論文は、基本的には着装行動と都市空間の関係の研究に新たな視覚による方法を提案するものである。それとともに、一例ではあるが東京において「銀座」と「表参道」を選び、その空間を往来し利用する人々の着装行動に見られる相違をどのように捉えるべきかという実証研究をもとに、場所のイメージが「場所と場所性」という概念で説明できることに逢着し、「場所と場所性」の理論化とそれを応用した研究の方向性を提案するものである。その点で、服装社会学研究の新たな一角を構築するものでもある。

学位申請者が冒頭でも述べているように、本論文では、場所によって異なるファッションスタイルの背景を理論的に解釈するという課題に対し、着装行動を研究するに当たっての理論として「場所と場所性」を取り入れることを提案し新たな可能性を明示することを目的にしている。以下、各章の内容について、要約するとともに、検証を加えることとする。

第1章においては、本研究の背景と目的について述べている。まず、着装行動の多様性を踏まえるとそこに場所との関連性を見出すことになる。しかも空間や場所に関する研究は、都市社会学、都市計画学、地理学など旧来の研究分野から急速な広がりを見せつつあり、それだけに「場所と場所性」という問題についても研究的関心は広がりを見せつつあることを指摘している。そこで、本研究は社会的行動としての着装行動と「場所と場所性」とが関連づけられる流れを確認し、今後の研究方法のあらましを明示している。

第2章では、着装行動の概念、着装行動に関する社会学的研究のレビューに始まり、着装行動と場所のイメージとの関係に辿りついている。行動、行為の理解は、社会学的基本的課題といえるが、ここではタルコット・パーソンズの理論をもとに、荻村昭典の着装行動論に結びつけている。この点は、服装社会学の基本的プロセスに基づくものであり、着装行動の研究領域に視野を広げるなかで、場所のイメージとの関連に着目している。さらにこの点については、申請者自身による調査から問題を提起するという方法もとっている。

第3章では、場所の理論に関する研究を初期社会学に求め、特にE. デュルケムとG. ジンメルの再評価に努めている。デュルケムについては「社会形態学的空間」とした空間論に社会学の萌芽を求め、D. ハーヴェイ等への影響も指摘している。また、ジンメルについては「形式社会学」の立場をおさえるとともに、その著「社会学」における空間と社会の空間的秩序に社会空間論を求めたことは評価できる。ジンメルの空間形式とその特性に関する所論は、「場所と場所性」との関連を想起させる興味深いものである。

第4章では、都市社会学的空間から場所概念への変容を省察している。言うまでもなく都市社会学の重要な一角は、シカゴ学派都市社会学であり、R. E. パーク、E. W. バージェス、L. ワースなどの唱えた理論である。ここでは、例の人間生態学、同心円地帯理論、アーバニズム理論などを検証してはいるが、シカゴという都市が直面した都市問題の解決という実践的課題が研究に反映されすぎているという限界に批判的な評価をくだしている。そして、シカゴ学派への批判と新シカゴ学派や新しい空間論の展開への道りを明らかにし、意味空間としての「場所論」へ到達している。ここで、H. ルフェーブル、D. ハーヴェイ、J. アーリ、E. レルフの所論を丹念に吟味して、場所と場所性という概念を重視する段階に至っている。即ち、ルフェーブルの空間の生産、ハーヴェイの政治・経済学的空間、アーリの場所の消費、レルフの場所と場所性というそれぞれの捉え方を「意味空間としての場所論」としてまとめ上げ、総括的に場所と場所

性に位置づけている。

第5章は、文字通り、「場所と場所性」と着装行動を研究するにあたっての方向性を学位申請者が提案することに重きがおかれ、事実上の本論文の結論を呈示している。場所の概念を確定したうえで、場所と場所性の構成要素を明示し、両者に通底する要件を整理している。その結果を場所性の明確化に活用するとともに、その形成過程を整理する作業に結びつけている。その成果として、場所性と着装行動、正確には「場所と場所性」と着装行動の関係という主題に関する本研究の理論的帰結となっている。それを実証的に証明するために、申請者自身による銀座と表参道に関する調査を通じた例が紹介されており、ひとつの研究事例ともなっている。

本論文は、一貫して社会学的立場での空間論を基本において場所と人間の行動（本研究の場合は着装行動）との関係を明らかにするという枠組の中で、着装行動における「場所と場所性」を論じたものである。レルフをはじめとする所論に多くのヒントを得ているとは言え、着装行動を正面から捉えなおし、その意味で場所と場所性を関連づけた点は、服装社会学の領域においては、極めて独創的な研究である。ただし、場所と場所性の概念の深化を求め、またそれらを具体的に形成している要因を抽出する枠組のより一般化を求める作業はまだ残されており、今後の研究を待たねばならないと言える。

学位申請者は、服装社会学の研究を志して以来、都市空間さらには場所と着装行動やファッション現象との関連性について考察を進めてきた。その成果が本論文であり、研究全体を通じた論理の構成、先行研究の省察、各種文献や資料の解読力は水準以上の資質を形成しており、博士（被服環境学）の学位を授与するに相応しいものと認定できる。